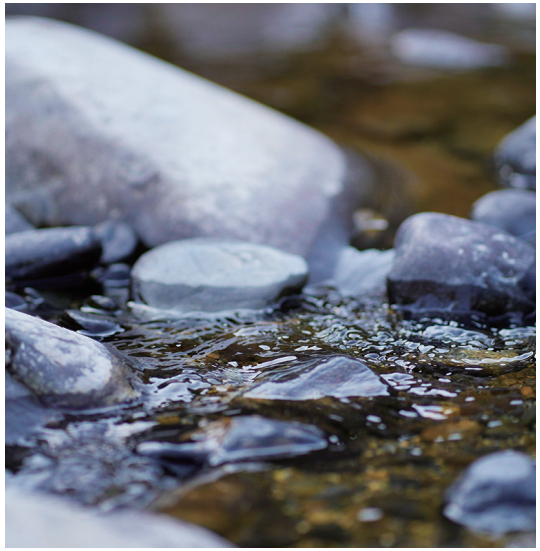

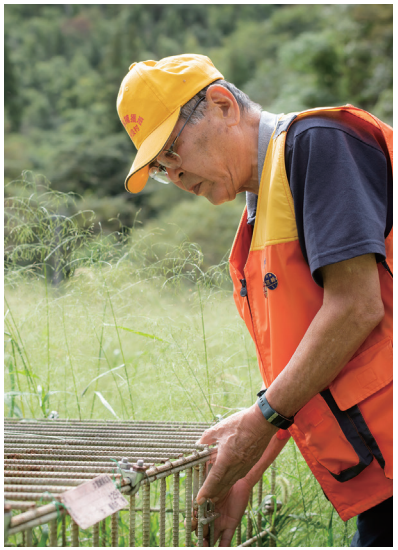

山の神に供えるための命でもあった、西米良の「山の恵み」

西米良の人々の歴史と鹿猟や猪猟は、切っても切り離せない深い縁があります。村人は狩猟の作法である「狩詞」を数百年前から守り、ルールに則った狩りを続けてきました。村人の重要な“生きる糧”として捕獲された山の恵みである鹿や猪たちは、食料としてはもちろん、神楽の季節には山の神に供えるための「贄（にえ）」とされ、村の暮らしにとって欠かせない存在だったのです。昨今の西米良のジビエ猟は、獣害対策として行われることも少なくありませんが、ジビエ食の需要が高まっていることもあり、村の人々の暮らしを支える重要な産業になっているのです。

長年の知恵で確立されてきた罠を使った西米良のジビエ猟のスタイル

「猟」という言葉を聞くと、山林の中で銃をかまえ、獲物を目掛け引き金を引く猟師の姿が目に浮かぶものです。しかし、昨今の西米良のジビエ猟はそのほとんどが銃による猟ではなく、罠を使った猟。というのも、銃を使って猟をすれば肉の中に弾が残ってしまい、それを取り除かなければ食べることができないからです。罠には、足にかかる仕掛け罠「くくりわな」と箱型の「箱罠」があり、罠にかかった獲物は頸動脈を切って止め刺しした状態で加工場へと運ばれてきます。生け捕りにするが故に、時には獲物が暴れることもあるため、一連の作業は危険を伴うものですが、大切な命を無駄にせず、鮮度の高い状態で処理するためには欠かせない作業なのです。